

解題

津 守 真

このたび復刻刊行された雑誌「幼児の教育」は、明治三十四年（一九〇一）に「婦人と子ども」と題して創刊された。後に「幼児の教育」と改題され現在に及んでいる。

創刊号は、明治三十四年一月二十九日、東京女子高等師範学校附属幼稚園内フレイベル会の発行となっている。発売所は東京日本橋の金昌堂である。その発刊の辞に、発刊の目的を三つ掲げている。第一は、児童教育法の研究である。わが国の幼稚園は、周知のように、明治九年に東京女子師範学校附属幼稚園に開設されたのがおおよその最初である。それから明治三十四年まで二十五年の年月があり、幼稚園は草創の時期を脱して、幼児教育関係者は、教育法の研究に關心を寄せるようになったのがこの時期であると言えよう。第二に掲げられているのは、婦人教育、ことに母としての婦人教育の普及である。幼児教育の直接の担当者である母親の教養は、幼児教育の大きな課題と考えられていたことを示すものである。この雑誌の主たる読者は、幼稚園の関係者であったが、母親の教養誌としての役割も自覚されていた。第三に掲げられているの

は、家庭に向かつての読書材料の供給である。明治三十四年当時には、母親が子どもに読んでやるための童話などの出版物も少なく、この雑誌は、昔話・翻訳童話などを創刊号から盛りこんでいる。

発行者であるフレイベル会は、明治二十九年に東京女子高等師範学校において発会した幼稚園保姆を主とする研究会であった。明治二十九年には、全国に幼稚園は二百二十二園あった。それまでに東京には二つの保姆会があったが、それが合同してフレイベル会となったのである。会長には女高師の校長が当るといふ規則で、当時の校長であった高嶺秀夫が会長となり、幼稚園長であった中村五六が主幹となった。明治二十九年四月二十一日のフレイベル会発会式は、新聞記者なども列席して盛大に行なわれたようである。創刊号の発刊の辞には、「本会はもと、幼児保育の方法を研究せんがため、同志相集りて設立せるもの、創立以来、茲に五年の星霜を経て、爾來漸く隆盛の運に向はんとす。今回更に規模を拡張し、ここに本誌を発刊して、以て大に当時の急務に向つて貢献する所あらんとす。」と述べられている。

最初の編集者は、東京女子高等師範学校助教、幼稚園批評係ひがし東基吉である。

後に東基吉が記すところによれば、当時高等師範の附属小学校では、新しい教育主義や教授法の研究を盛んに行ない、一方、高島平三郎が雑誌「児童研究」を出して全国的に児童研究の熱がたかまっていた。幼稚園については「内では当時尚フレイベル主義の保育法を固守する」人々を相手に、「外では幼稚園不要若くは有害論を強調する人達に対し」（東基吉、くめ、皐月歌集、歌集情春）教育論を発表する機関誌の必要を感じ、「婦人と子ども」が発行されることとなったと言われている。当時米国では、フレイベル主義の保育法に対する批判が高まり、児童の発達と特性に合った保育の主張が活発であった。この雑誌は創刊の当時から、新教育の思想をもって発行されたことがわかる。（五十卷十一号昭和二十六年に書かれた東基吉「婦人と子ども」創刊当時のことも其頃の幼稚園の状況に就いて）を後に再録してある。）

創刊号の表紙は、当時女子高等師範学校教授となつたばかりの少壮日本画家荒木十畝じゅっはによつて描かれた、なでしこは、それを配した図である。「母蘇に撫子は、母と児に通ぜしめたるなり」と説明されている。この雑誌の性質をはからずもよく示している。

荒木十畝は、明治三十七年、米國セントルイス市に於いて開催された万国博覽會に「秋汀群鴨」の大作を出品して銀牌賞を得ている。その後多くの名作を発表し、帝國美術院會員としても活躍された。後に著された「東洋画論」(小学館、昭和十七年)には、日本画の精神について次のように記している。たとえは松を画く場合「あらゆる松を研究して夫々の松の夫々の形とその生活とを諒解しなければならぬ。……野辺の稚松、懸崖松、海浜松、夫々に異なる生活の正直なありの儘の姿の告白にあらずや。自然は言葉なくして形を以て告げる。この形の言葉を解せざる者は芸術家の資格なしと言はざるを得ない」と。画家が松を画くときに、松の生活と、それが無言に語るところを諒解せねばならぬと喝破していることは、そのままに幼児の保育にも通ずるものである。いま復刻に当たつて、この創刊号の表紙を眺めると、幼児の生活に合った保育を主張するこの雑誌を象徴するように思われる。

創刊号からじきに、新教育の先駆とも云うべき遊戯論や恩物批判が、いろいろの人によつて書かれる。第一巻三号(明治三十四年)で東基吉は、「幼児保育法につきて」の中で恩物批判を紹介し、同巻九号では「現今の幼稚園保育法につきて」と題して、恩物信奉者に対して師に忠ならんとして師の功績を滅却するものと批判している。また第三号七卷(明治三十六年)、和歌子氏による「幼児の汽車遊び」は雨の日の室内の遊びの実験報告である。

第六卷四号(明治三十九年)より、発行所が弘道館となる。

第七卷一号（明治四十年）より、発行所がフレールベル会となる。

第八卷十号（明治四十一年）より、和田実が編集者となる。この年、東基吉が宮崎師範学校長として転出したためである。和田実は、女高師助教授であった。長年にわたり、幾多の自由保育論を本誌上に発表し、新教育の先駆者であったと云える。数年後に野に下り、目白幼稚園を開設し、自論を実践することとなる。

第九卷一号（明治四十二年）より誌題に幼児教育研究雑誌の語を冠し、幼児教育研究雑誌「婦人と子ども」となる。幼児教育の研究誌としての性格が一層自覚されてきたと言えよう。

第十二卷（明治四十五年）より、倉橋惣三が編集者となる。倉橋惣三は、この後四十年間にわたり、この雑誌を通して幼稚園の新教育の指導者として活躍する。

同巻四号には、当時米国における児童研究の指導者として盛んに活躍していたスタンレー・ホルの幼稚園教育論を紹介して次のように述べている。「幼稚園とは、自然の生んだ児童といふ美しい花の咲いている園をいふのです。幼稚園は、子供に対する新たな世界であります。一度は人工的であった幼稚園は、今漸くにして、自然のままな原始的生命を復活して来たのであります。……吾々は、も早や、牧歌を歌ふ詩人たる要はありません。……園芸家、農芸家たるの要はありません。温室も芝生も、運動場も、木蔭も、小川も、池も皆その中（幼稚園）に備っています。……新たな幼稚園の機運は、此の旧套を破って、真美なる大自然の心と合致するものでなければなりません。」これは、倉橋惣三自身の幼稚園教育論の出発点とも言えよう。「一度は人工的であった幼稚園」とは、明治初年以來の恩物中心の幼稚園である。そして今や、「新たな幼稚園の機運」が感じられている。これから大正期にかけてのこの雑誌には、新しい幼児教育をつくり上げてゆこうとする新鮮な活力を見ることが出来る。

第十八卷十二号（大正七年）より、発行所がフレールベル会から、日本幼稚園協会となる。この年十月のフレールベル会臨時総会において、会名を変更したためである。（「会名変更と改題を中心にして」と題する倉橋惣三の文章——三〇巻四号、昭和五年——を後に再録してある。）

倉橋惣三はこの前年（大正六年）に、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事（園長）となっている。

第十九卷一号（大正八年）より、「婦人と子ども」は、「幼児教育」と改題される。これも前記フレールベル会の総会の決議によるものである。これについて倉橋惣三は、「別段深い理由もなく、本誌の趣旨を一層明かにしたに過ぎません。」と述べている。

第二十三卷九号（大正十二年）より、誌名が「幼児の教育」となる。その直後関東大震災が起り、印刷所が焼失して休刊となる。十二月に復刊する。この年、発行所が日本幼稚園協会から教文書院にかわる。しかしまた休刊し、次に復刊するのは大正十三年四月である。したがって、第二十四卷一号は四月に発行されており、この年は八号までしか出ていない。この間のことは、倉橋惣三の筆による「お茶の水の幼稚園の焼跡に立ちて」（二十三卷十二号）、「大災と幼児教育」（二十三卷十二号）、「お茶の水に帰る」（二十四卷一号）、「この春」（二十四卷二号）に記されている。このときの災害のために、明治九年以来の古い資料も焼失したし、また「婦人と子ども」のバックナンバーも焼失して、その後附属幼稚園並びに附属図書館倉橋文庫において蒐集にとめたにもかかわらず、今回の復刻に当たって、完本を揃えるのに並々ならぬ苦勞をしたのである。

第二十五卷（大正十四年）は、四月号が出たあと休刊し、八月に五号が発行されている。その号から編集者が堀七蔵になる。大正十三年末に倉橋惣三は、附属幼稚園主事から附属高等女学校主事となり、堀七蔵が附属幼稚園主事となった。また発行所が日本幼稚園協会に変更され、「前発行者教文書院越元新吉とは一切の関係を断りました。」という謹告が掲載される。出版社との間に何か紛糾があったものと思われる。これま

でも出版発売所がかわっているが、それはこの雑誌が女高師内日本幼稚園協会で編集の一切を行ない、商業ベースに乗ることなく、幼児教育の本質を追究しようとする態度を貫いたためであろう。編集者と出版者との両者の苦勞がうかがわれる。

大正十五年には幼稚園令が公布される。本誌にもその関係の記事が豊富に見られる。

第三十卷十二号(昭和五年)より、倉橋惣三が再び附属幼稚園主事となり、本誌の編集者となる。本誌の第三十卷を迎え、十二号に「幼児の教育半世紀の辞」が倉橋惣三によって記されている。(後に再録してある。)

これからしばらくの時期は、倉橋惣三によって指導された誘導保育の全盛期であり、この雑誌は誘導保育の拠点となる。これは、米国における新教育の実践に対応する。米国の I・K・U (International Kindergarten Union) 万国幼稚園連盟が、新教育の原理にもとづく幼稚園カリキュラム (The Kindergarten Curriculum) を作成したのが一九一九年(大正八年)であり、幼稚園及び小学校低学年カリキュラム (The Kindergarten Primary Curriculum) を作成したのが一九二二年(大正十一年)である。またその翌年一九二三年(大正十二年)にはパティ・ヒル (Patty S. Hill) が、幼稚園及び小学校一年生のための活動カリキュラム (A Conduct Curriculum to the Kindergarten and First Grade) を出版している。これに対比して考えることのできる「系統的保育案の実際」が日本幼稚園協会から出版されたのが、一九三五年(昭和十年)である。

「幼児の教育」誌で、誘導保育の実践報告が掲載された最初は、十八卷三号(大正七年)の「よ子」動物園あそびの記」であろう。次の記事は、二十五卷五号(大正十四年)の及川ふみ「八百屋遊び」である。それから昭和初年には、「箱のお家」「村」「幼児の生活」「人形のお家」「わたくし達の自動車」「旅へ」「お店屋あそび」等が次々に掲載される。誘導保育の理論編である倉橋惣三の「幼稚園保育法真諦」(昭和九年)「保育案」(昭和十一年)等が講演の形で掲載され、それに対する聴衆の感想なども併せて記される。また附属幼稚園の

みならず、各地方の誘導保育の実践記録が紹介される。昭和前期のこの雑誌は、誘導保育の記事で華やかな時期と言える。誘導保育の実践は、そのままの形ではひろく普及したとは言えないが、その遊びを中心とする保育の考え方において、部分的、間接的影響は大きく、現代の保育の基礎を形作っていると言っても過言でないであろう。

この時期の誘導保育は、米国の幼稚園の新教育運動なしには考えられないが、倉橋惣三が「幼児の教育」誌上で展開している保育論はこれにとどまらない。具体的な保育の根底にある子どもの見方が、詩的な表現をもって、一貫してあらわれている。その最初期の短文は、十二巻一号（明治四十五年）で、倉橋惣三が本誌の編集者となった年の一月号である。

新らしみ

新らしみは外になく内にある。物になく心にある。年々歳々同じ日の光に、けふは初日の新らしみがある。きのふも汲んだ井戸の水に、けさ若水の新らしみがある。

不断に心の新らしみを以て、物の新らしみを感じ得るものは幸である。その目に光りの新らしみを見、その身に音の新らしきを聞いて、その世界は常に潑刺たる新味に充ちて居る。ういういしい子供心は即ちこの最も幸なるものである。

陳り易く滞り易き我等の心を奮い起して、子供と共に常に、心の新らしき人でなくてはならぬ。陳りし心ほど子供に遠きものはない。そは別の世界を見るからである。

ここでは、新教育の「新」は、古いものに対する新ではなくて、ものの見方の転換をさす、心の本質にか

かわる「新」である。おとなにとって、自己の原点として心の奥にある子どもの世界の存在を前提として、子どもを見ている。日本の児董観として、伝統的に多くの人々の中にある見方と言えるかもしれない私は思っている。その後大正期、昭和期とひきつづき、子どもの世界と保育の心を示す文章が次々に掲載されてゆく。この点から言うならば、日本の幼稚園の新教育は、単に一時代の流行にとどまるものと見るべきでなく、十六卷十二号(大正五年)の「斯くてまた暮れゆく」の中に言われるように、「幼稚園教育を根本的に考え」ようとする運動である。この十六卷十二号の同じ文章が、「私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変わっていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。」という文章を付加して和三十年にこの雑誌に掲載された。倉橋惣三の最後の文章である(五十四卷一号、昭和三十年)。

こうしてこの雑誌を最初から見えてゆくと、日本の幼稚園の新教育が、いろいろの要素をふくんで、ダイナミックに形成されてゆく有様を手にとるように見ることができ。

その後昭和十三年頃より、この雑誌にも戦争色があらわれてくる。第二次世界大戦の末期には、頁数も少なくなる。そして昭和二十年一月から、昭和二十一年九月まで休刊となる。復刊は昭和二十一年十月である(この時の「復刊のことば」を後に掲げる。)なおこれより、実務を株式会社フレール館に委託して、現在に至っている。五十三卷二号(昭和二十九年)から私が編集の責任者となり昭和五十四年に、第七十八巻である。

今回の復刊は、戦前に発行された分であり、第一期は、第一巻(明治三十四年)から第二十巻(大正九年)、第二期は、第二十一巻(大正十年)から、第四十四巻(昭和十九年)までの分の予定である。

解題として、客観的な記述のみにとどめるつもりであったが、どうしても私自身の観点から、ぬき出して

記すことになってしまった。これはあくまでも私の観点であることを記して、読者のお許しを乞いたいと思う。これだけの期間にわたる雑誌は、読む人によって、さまざまな読み方ができると思う。私がこの雑誌の価値を述べるまでもなく、最初から目を通して頂ければ、この雑誌自らがその価値を語るであろう。

この別冊には、この雑誌の成り立ちを語るものとして、最初の編集者である東基吉および最も多くの部分の編集を担当された倉橋惣三の、この雑誌に関して記された文章を抜粋して再録した。また明治元年から昭和十九年までの年表を付し、この雑誌の主要な事項及び幼児教育全般の理解が得られるようにした。ただし時間の制限のため、不完全なものになったことを残念に思っている。また戦前の分のすべての総目録を付した。

この雑誌の復刻に当たっては、お茶の水女子大学付属幼稚園の所蔵本、及びお茶の水女子大学付属図書館、倉橋文庫の所蔵本を底本とした。倉橋文庫の所蔵本は、当文庫設立の際に、甲府進徳幼稚園、進藤つる氏より寄贈されたものである。それらになお欠本があり、その分は、宝仙短期大学付属図書館、及び成田図書館（成田山新勝寺）所蔵の雑誌によって補った。これら関係の方々の御理解と御厚意がなければこの復刻は完成されなかったであろう。復刻刊行会関係者一同と共に厚く感謝する次第である。また完本を揃えるのに、編集担当者の丸山直英氏の苦勞には並々ならぬものがあつた。併せて厚く謝意を表したい。

復刻の題字は、東山魁夷画伯の筆である。倉橋惣三の旧知として、特に御多忙の中を求めに応じて下さつたものである。